

卒業論文の要旨

論文題目	思想としての古着:アイデンティティの固有化と軽くなる時間へのもがき
氏名	戸田 拓未
メジャー	哲学、倫理学
<p>(要旨)</p> <p>本稿の目的は、現代日本において古着が流行する理由について、質問紙調査を通じ、若者の気分や時代の空気の現れとして分析することである。</p> <p>本稿の流れは以下の通りである。はじめに古着を定義した上で 1990 年代の古着ブームとの比較を行った。次に、それを踏まえた上で街頭で質問紙調査を行い、結果について分析した。質問紙調査を踏まえ、考察においては、古着特有の魅力やそれを着る若者たちの気分・思想を明らかにした。</p> <p>調査は、下北沢と町田の古着愛好家の 17 名に対して行われた。質問項目は年齢、性別、職業、古着を着たきっかけ、古着を着る際の気持ち、などであった。古着は安いことが魅力であると一般的には考えられているが、調査結果にそのような回答は一切なく、むしろ古着の魅力は「他人と被らない」「1 点モノである」ということであると分かった。これらの回答や自由記述からは交換可能な記号として人間までもが消費される近代社会で交換不可能な存在として認めてもらいたいという欲望が読み取れる。また、他者との差別化を図り自らのアイデンティティを確立したい欲求も認められる。</p> <p>しかし「他人と被らない」「1 点モノである」というのは古着を着る本質的な理由にならない。なぜなら古着ではなくとも DC ブランドなど個性豊かな衣服は既制服でもたくさんあるし、多くの古着は文字通りの「1 点モノ」ではないからである。</p> <p>では古着と既制服の決定的な差は何か。それは古着の持つ「時間性」にあると考えられる。古着の表面は擦れていたり歪んでいたり、退色していたりする。そうした損耗を通じて、人はその服がかつて着られていた過去があったこと、その時代固有の時間が流れていたことを感じるができる。また、古着は重い。昔のコートは素材的に重いと言われるが、それは物質的な意味だけでなく時間的、空間的な意味でも重いのである。対して現代のファストファッションブランドは、広告において、服やそのライフスタイルの軽やかさを強調する傾向がある。</p> <p>古着を着るという行為は、今の時代、時間が軽くなりすぎていることを意味する。古着を着ている彼ら彼女らは肌感覚のレベルで画一化・大量生産・大量消費という高度資本主義経済(消費社会)がモードとともに押し進めてきた記号化に反抗しているのであり、一つの記号として消費されることを拒む。「古着を着る」とは現代の軽さに抵抗して、「時間を着る」ということなのである。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>当該論考は、現代において古着が再流行し、若者が古着を着る理由について、服飾史、モード思想、ファストファッション論などの先行研究を踏まえ、質問紙調査を行い、考察したものである。古着が現代社会の時間の速さ、営みの軽さへの抵抗の象徴であるという著者の指摘は、きわめて興味深い。また労力を費やして実施された古着愛好家への質問紙調査や、写真撮影資料は資料的な価値も高い。当該論考を学生たちが今後参照すべき優秀論文として推薦する。</p>	